

ライブニッツにおける言語

清水 洋 貴

一、はじめに

認識や思考を構成するために言語は不可欠であると思われる。

これに対して、言語による思考は形式的であり、なんら「実質」を伴わないのではないかという批判が考えられる。言語で思考する（言語化される）以前のもの、あるいは、付随するものの側に実質があるのではないか。その場合には、例えば、実質は思考作用や思考対象の側にあるのではないか。

また、言語や思考作用、思考対象と対極に、何らかの「経験」や物質そのものの側に実質があるという立場も考えられよう。経験を介することがなければ、認識とは人間のひとりよがりの妄想にすぎないのではないか。つまり思考されているものや言語化されたものだけでは頼りなく思われ、その外に、言語化をもたらした何ものかがあり、それにも触れていると確信できなければ、自然言語であれ、人工言語であれ、われわれ人間の妄想が、程度の差はあっても、人間的な秩序正しさによって述べられたものにすぎないと、不

安が申し立てられる。

ところが、出口を見いだすことは容易でない。この経験もまた言語を介してなされ、言語によって構成されているのではないかという疑問が生じるからである。その限りでは、経験もまた、人間の認識や思考の訂正をもたらすものではない。仮に経験が人間的認識内での整合性を高めるとしても、そのような認識から得られた知識を真理と呼ぶかどうか別の問題である。

このような言語と思考、真理をめぐる問題に対して、ライブニッツは様々な解決策を提示している。

われわれの認識は言語の操作・計算内に留まるのであり、その活動が言語の外にある何ものかに対応しているか、いかに接触しているかを知ることとはできないし知る必要もないと言いつける立場（言語の計算主義）もあれば、言語の系列とその外にある「もの」の系列には関係性の対応が確かに見られ、設定されていると主張する立場（表出論）もある。経験や実験、蓋然的知識を導入しながら、言葉の使用法や定義を確定していくこうとする立場（実在的定義

の議論)もある。われわれの外にある事物に完全に対応する言語を創造することで、この種の不安をはじめから一挙に取り除こうとする立場(普遍言語主義)も考えられる。さらには、言語活動に先行する非言語的な場面を導入することによって、言語活動を基礎づけようとする立場(apoception主義・コギト主義)もライプニッツにはある(例えば「モノドロジー」§30)。さらには、言語も、あらゆる種類の経験も、神と人間の共有する思考の単位としての概念・概念・本質に従属するのであって、それらのレベルでは思考可能なものの範囲は決定されており、現実存在を認識することは経験に依存するという立場(可能世界論や偶然的真理の主張)もある。また自然言語を比較言語学的観点から検討する立場もある。

これらの立場がすべて、ライプニッツの哲学には見出され、隣接し、一部は重なりながら、ライプニッツにおける「言語」や「記号」の規定を困難にしているのではないか。このことが、最終的に検討されるべき課題であると思われる。ライプニッツ哲学全体に関わるこのような大きな問題を検討するための準備として、本論文で扱いたいのは次のことである。

人間は真理を捉えうるのかという問題関心を根底におきながら、言語と事物との対応関係を基礎付けるための二つの理論を検討したい。第一に記号の實在的定義であり、第二に表出論の問題である。そのために、まず二節では、ライプニッツがどのように唯名論を受容し、どのような点でホッブズの唯名論を乗り越えようとしているのかを確認する。つぎに三節では、ライプニッツの唯名論の課題である、普遍的なものの認識可能性の問題を検討したい。その際に、

言語や記号がどのような役割を果たすのかを考察する。記号の一般的役割をおさえて、四節では、事物と言語の対応の基礎づけの理論として表出論を、第五節では實在的定義の議論を検討する。最後に六節において、實在的定義の第一の段階で導入された「経験」が言語論の中で占める位置を検討する。個体的実体のみを存在するものとしながら、一般的概念を確保しようとする立場が、「経験」することといかなる関係にあるのかを明らかにする。

二、ライプニッツとホッブズの唯名論

この節では、言語の役割を考える基盤として、ライプニッツが普遍的な概念の実体的存在を否定するという唯名論の立場をホッブズと共有しながら、どのような点でホッブズを批判するのかを考えたい。

『結合法論』から一六七〇年代までのライプニッツの思想をホッブズからの影響の有無から考察するという論点は、二〇世紀初頭のクトゥラの研究において既に取り上げられている。その著書の補論Ⅱにおいて、クトゥラは、『結合法論』だけでなく、普遍的記号学の一般的部分にまでホッブズの影響が見られるという「二エス」の論拠を一つ一つ検討しながら、「ライプニッツが論理学者であるかぎりにおいて、先駆者と鼓吹者がいるならば、それはホッブズではなくて、デカルトである」(Couturat, p. 462)と主張する。ライプニッツは確かにホッブズの機械論と国家の理論に関心を持っていたが、論理学には関心を抱かず(§462)、さらには神学に対する見解の不一致も自覚していた(§463)。ライプニッツはできるか

ざり機械論を採用しようとするが、最終的には非物質的原理を前提する点でホッブズと見解を異にする(16c)。そして本論文の関心からして重要なのは、以下で検討するが、唯名論に関する考え方が両者で異なるという点である。全体として、クトゥラの結論は、論理学および普遍的記号学の構想に関してライブニッツが、ホッブズの思想を継承したものとみなすことを否定するものである。

それでは具体的にライブニッツの唯名論に関する見解を追うことにしよう。一六七〇年の『ニゾリウスへの序文』においては、「オッカム自身はトマス・ホッブズが今やそうである程には、唯名論的ではないと私は信じる。むしろ、ホッブズは唯名論を越えていると思われる。というのは、唯名論のように、普遍を名前に還元することに満足せず、事象そのものの真理は名前に依存し、さらには、人間の意志に依存するとホッブズは言うからである。なぜなら、真理は、伝えられるところでは、名辞の定義に依存し、定義は人間の意志に依存するからである」(G. N. 158)つまり、ホッブズは、唯名論を支持するライブニッツにとってさえ、行き過ぎた立場と見なされたのである。ライブニッツは「唯名論は、個別の実体を除いて、すべては裸の名称(nuda nomina)であるとみなし、それゆえ抽象的なものと普遍的なものの事象性(abstractorum et igitur universalium realitatem)をまったく取り除く」(G. N. 157)という規定を唯名論に与えるわけだが、抽象的かつ一般的概念を対象に与えることができることを保証し、彼はホッブズやニゾリウスのような唯名論者のように普遍的なものを名辞に解消することを拒絶するのである。では、存在するのは個体だけであるが、その個体を参照すること

から、普遍的概念を用いることができるとはどういう立場であろう。それは普遍を個体の集積の全体ではなく、対応する種の個体それぞれに配分された本質として理解する立場である。ニゾリウスは、「すべての人間(あるいは人類全体)は理性的であるという命題の意図(ratio huius propositionis)は、(一)で草を食べるすべての羊は白いあるいは群全体は白いという命題の意図と等しい」(G. N. 160)と主張する。ライブニッツは、この考えを延長していくと、「(二)で草を食べるすべての羊から抽象された普遍が、ニゾリウスが主張するように、すべての羊から寄せ集められた群全体と同じであるならば、群全体は(一頭の)羊である(totus grex est ovis)」という命題は正しいことになるだろう」(G. N. 160)と反論する。羊の群を観察すると、どの羊も白いから、そのことゆえに群全体は白いと結論づけるのだとすれば、どの羊もそれぞれ羊であるから、群れは全体として羊であるというような推論も成立することになるとライブニッツは言うのである。ライブニッツの反論は屁理屈のようにも思われるが、彼の言いたいことは、次のことである。複数の個体に述語(普遍概念)がどうして正当に結びつけられていると言えるのか、このことは事物の構造、本性に根拠があるのであって、単に文法構造によるのではないということである。このような前提があつて初めて名辞や命題に依拠することができるといのがライブニッツの唯名論者批判の要点である。

ライブニッツがホッブズに対する反論として、「数学において、そして他の学問分野においても、たとえ表記が変更されるとしても真理は同一のままである。そして、十進法があるいは十二進法

が使われるということは問題ではないのである」(ibid.)と述べ、表記法が変わっても形式的関係性は維持されることを持ち出しているということは、個体に基づく普通の考え方から理解されねばならぬであろう。普通のものの位置づけという関心から記号や命題の扱いは捉えられているといえよう。

三、普通の関係はいかにして認識されるか

ライプニッツの唯名論に対する見解を概観したわれわれは、つぎに数学において確認されるような関係性を、人間精神はどのようにして捉えるのかを考察してみたい。すなわち、各個体に普通や数学的關係性が含まれているといっても、実際には言語や記号を使用して述語や関係性を論じるのであって、個体と普通についての理論とは異なる議論を必要とすることになる。

何らかの知識が発見されるために記号と推論をどのように規定するかについては、すでに初期において論じられている。とりわけパリ滞在中に書かれたノートが注目される。ダスカルによれば、ここでの主張には二つの反する傾向が見出せるという。

一方では、推論において、文字の使用が有益であり、文字を思考の構成要素とみなすのである。他方で、対応する観念をまったく構成できないような文字による定義が使用されることによる危険性が論じられる。文字の結合規則には適合していても、観念として矛盾するような場合がありうる。この場合、文字は補助的役割に留まらざるをえない。

生涯、ライプニッツは、この二つの傾向の間を揺れ動いていたと

言えるだろう。¹⁸⁾「何らかの人間の思想のアルファベットを案出することができ、そのアルファベットの文字の結合とその文字からできている言葉の分析によつて、すべてのことを発見し判断することができる」(G. III, 126)という普通記号法の理念に基づいて、すべてが解決されるという望みを捨てはしないが、他方で言葉や文字への不信心は完全に払拭されることはなく、言葉を検証する次元としての観念の秩序ともいべきものを確保しようとしていたこともまた事実である。すべての人にとつて同一であるような「観念そのもの」の位相に直接関わるような思考を基礎づけようという考えが、ライプニッツの構想の内にはあつた。同時に、非シンボルの思考なるものが残存し、それに近づくために、シンボルの思考が役に立つことも認めているのである箇所も見られる。

このような動揺の原因は、言語を媒介にした認識の真理としての妥当性に信頼をおけないという事情による。このことは、普通の関係性を捉えることは、なにか純粹思惟のようなものによるか、それとも記号や命題によるのかと言いかえることができる。真理の基準として依拠できるものは何かという点で、一七世紀の哲学者の間で意見の相違が見られ、言語や記号をどれほど重要な要素と見なすかという点で見解の相違が見られるのである。

ライプニッツは、動揺がみられるとはいえ、基本的には思考の形成に記号あるいは言語が欠かせないと考えるわけだが、このことを一六七七年の「対話」という小片の論述から確認する。

ここでライプニッツは事物の有する関係に対応する記号同士の△関係▽が非恣意的であると主張する。その上で、名辞や命題に真

理を還元する（ライブニッツの捉えた）ホップズの立場に反対している。「その記号の用い方や記号同士の結合には恣意的ではないものがあるような記号自体がたとえ恣意的であつても、記号と事物の間の一種の相応と、同一の事物を表している異なつた記号同士の関係は恣意的ではない。そしてこの相応や関係が真理の基礎である」（*Nam etsi characteres sint arbitrarii, eorum tamen usus et conexio habet quiddam quod non est arbitrium, scilicet proportionem quandam inter characteres et res, et diversorum characterum eisdem res experimentum relationes inter se. Et haec proportio sive relatio est fundamentum veritatis.* G, VII, 192）とどうように、事物と記号を論じる上で、事物と記号の相応（*proportio*）や記号間の関係（*relatio*）が真理そのものではないにしても、真理の基礎となりうるのである。ある一定の規則をもつ記号体系に關して、それを各名称の恣意性という観点から全体としては恣意的であると考えとしても、さまざまな事物を記述することができ、同一の事物をさまざまに記述する構造をもつ記号体系ならば、このことがまさに確固たる真理に対応しうる記号体系であることを示している、とライブニッツは考へるのである。

ライブニッツが提示するホップズ批判の大きな論点の一つは、このような矛盾律や同一律の真理、そしてそれらが応用された数学的真理に見られるような形式的普遍性 \vee が恣意性を免れているという点にある。前節でも確認したように、各個体のうちにある普遍という考え方を具体的に展開するとき、ライブニッツがまず第一に論じるのが、数学においてみられる形式的関係であるといえよう。

関係や相応を紐帯として、思考構成や認識の構成に対する言語の役割を以下のようにまとめることができる。第一には「確かに、もし記号がなければ、われわれは何ものも判明に思考できない」、推論をする（こともできない）（*Imo si characteres absissent, nunquam quicquam distincte cogitaremus, neque rationaremur.* G, VII, 191）というのである。思考の言語に対する依存性をライブニッツは全面的に認めている。

第二に、記号は文字だけに限定されず、「紙のうゑに描かれた円」（*circulus in charta descriptus*）¹⁾なるいなどい幾何学的研究に役立つ以上、「一種の記号とみなされるということである」、思考を形成する上で役立つものを、「一般的に記号と捉えている」。

第三に、記号と事物（あるいは記号が指示する対象）との間には類似性は「切要な（こと）である」。例えば、「0」と無とか、数学の議論における「a」という記号と「線分」とはなんら類似したものをもたない（G, VII, 192）²⁾と言われる。あくまでも言語（あるいは文）の指示する対象のもつ構造と言語相互間の関係が対応していることが重要なのである。

第四に、同一の事例を違つた記号が表現するという事態は可能であるということである。「解析の場面でも同様で、違つた記号を用いた方が事物の違つた側面をたやすく浮かび上がらせることがあるとしても、真理の基底は常に記号の結び付き方と配置の仕方の内にある」（*Et in analysi, etsi diversis characteribus diversae apparent facilius rerum habitudines. Semper tamen basis veritatis est in ipsa conexione atque collocatione characterum.* G, VII, 192）とどうように、事態の認識

に關して、さまざまな表現の仕方があり、そのなかには、より適した表現と劣った表現が存在し、より説明範囲が広い表現を採用することが適切であるとされる。

觀念や概念をひとまず考慮しないとしても、ライブニッツは言語や記号といったものに、思考を外在化し他人に伝えるという機能だけでなく、思考の形成そのものに直接的に關わる構成要素としての積極的な役割を与えていたことはここにおいて明らかである。ライブニッツにおいては、記号、しるし、文字、図形等々は、事物の側に吸収されることなく、事物が關係として有している真理を、人間精神がとらえる契機を与えるものとして捉えられている。そして、關係性の認識とは、關係性をよく表現する表記法の創造であるといえよう。

四、問題構成と表出論の射程

上記のようなライブニッツの考える記号やしるし、図形の一般的機能や特性は、幾何学や代数学の記号や式をモデルにして考えられており、数学研究や自然科学研究といった実践的な場面から特徴づけられているように思われる。それでは、われわれが問題にする記号と事物（あるいは事物なるものが想定できないならば、記号対象）との一致の議論はライブニッツには不要だったのだろうか。

数学者、科学者、歴史家としてのライブニッツにとっては、率直に言つて、そのような議論は必要なかっただろう。しかし、諸学問の存立基盤について、そしてそもそも人間には何を思考しうるかを考える場面でのライブニッツとつては言語と事物、真理をめぐる理

論が必要だったのであり、何らかの基礎が打ち立てられねばならなかった。そのような場面に彼を向かわせた人物の一人として、再度、ホッブズを取り上げてみたい。

ライブニッツのホッブズ理解からすると、ホッブズは、「真理は事物でなく、陳述に基づく。なぜなら、「真」は、たびたび「仮象」や「虚構」に對立させられるとはいえ、真は、命題の真理に帰されるべきである」(Veritas enim in dicto, non in re consistit: nam etsi verum opponatur aliquando apparenti, vel ficto, id tamen ad veritatem propositionis referendum est De corpore, I-3-7 p. 31-32)と主張し、「真理とは、事物の性質ではなく、命題の性質である」(Neque ergo veritas, rei affectus est, sed propositionis, ibid. p. 32)という立場であり、真理は命題の連結の内にあるのであつて、それは事物に關する知識であるとはいえないという立場であることになる。

このようなホッブズの立場に満足しないライブニッツが、提出した二つの議論が、「記号論的 sémiotique」解決と「実在的定義 la définition réelle」の議論である。これらの議論は、いわば個体に依拠した普遍的捉え方より具体的な展開とみることができよう。

記号論的な解決とは、「記号間のある關係の存在を示すこと」で「記号そのものが恣意的であつても、その關係は恣意的ではない」という主張である。だが、命題と命題、図と命題、図と図などの間の關係を越えた様々な關係の表出をライブニッツは追求しているように思われ、ダスカルの言う「記号論的」解決としてこの立場を捉えるのは十分ではなく、それを含みより広範な「表出論」の立場として、ここでは第一の立場をとらえた方がよいと思われる。

一方、ある事物あるいは概念の「定義」が、それ自体として無矛盾的で可能であるかどうかを判断することから、ある事物ないし概念が可能であることを明らかにするのが「實在的定義」の議論である。それは定義を構成する概念がどこまで分析されるのかということによって、事物の存在の蓋然性の段階が分けられる。最終的にはある一つの概念が、その内部において、原始的な構成要素にまで分析されることが理想とされる。

このように、ホッブズの立場に対して、二つの解答が与えられるということは、その立場が二種類に解釈されうることを示しているだろう。つまり、ホッブズが主張する議論を、恣意的なのは各名称であつて、概念のレベルは非恣意的である（このように解釈するのが「記号論」あるいは「表出論」の立場である、つまり同一の対象について様々な表現が可能であり、概念間の関係性に依拠すれば、真理性を主張できる）と理解しているか、それとも名称レベルも概念のレベルも恣意的である（このような解釈を乗り越えることを目標とするのが、「實在的定義」の議論である）と理解するかによって、ライブニッツの提示する解決が異なるのである。

問題全体を整理するために、事物—概念（観念・思维）—記号という三項構造をモデルにすると、ライブニッツの想定する限りでのホッブズは「事物」と「概念—記号」の間に断絶を設け、真理とは「概念—記号」の内で一般名辞を計算することに過ぎないとしている。ホッブズにおいては、「…推論（REASON）とは、我々の思考（thoughts）を符合づけ（marking）記号づける（signifying）ために協定された（agreed）一般名辞の連鎖の計算（reckoning）以外の何

物でもない」（Leviathan, 第一部第五章 p.30）のである。

一方、ライブニッツにおいては、問題が錯綜しているように思われる。つまり、彼の課題が、概念と記号の間の対応関係を基礎づけることに絞られており、それ以上のことは不可能であるのかのように解釈しうる面もあるが、その立場を越えて、ホッブズが放棄した「事物」と「概念—記号」の間の対応関係も何らかの形で基礎づけようとしたと解釈しうる面もあるように思われる。

記号論（表出論）的解決とは、諸事物間のもつ関係と記号間（あるいは命題間）のもつ関係の対応関係を保証することで、中間に設定された「概念」、「観念」、「思维」が消去され、「項図式化された解決策である。ここから、文や語句の操作規則（使用方法）が確定していく事態（諸事物の持つている関係が明らかになるという事態が、同時に展開されるとみなされる。この方向を押し進めていくと、事物の考察と等価な記号操作だけからあらゆる知識の獲得が可能であるとする記号主義的認識論が導出される。こうなると、観念はおろか、事物までも考察対象にはならなくなる。これはもはや普遍記号学と変わらないだろう。記号とは、それによって他の事象相互間の関係が表出され、しかもその取り扱いが事象の方よりは容易なものである。それゆえ、記号の側でなされる操作すべてに、事象の側のある命題が対応する。そこで、事象そのものの考察を、記号の取り扱いが終わるまで延期することができる」（GM, V, 141 「幾何学的記号法」, 1679）と言われるのはまさにこのような事態である。

記号論的解決から見ると、ライブニッツの独自性は、記号が表

現する事物からも、使用する主体からも独立して記号の関係が考察される統辞論的問題構成に存すると言えよう。

五、實在的定義と名目的定義の議論

だが、ライブニッツの三項図式における問題は、統辞論的解決だけでなく決着がついているのだろうか。「事物」と「概念—記号」の間にも何らかの対応関係を基礎づけようとライブニッツは試みていたと解釈する余地はないのだろうか。それは、形式的関係性を超える議論に接続することになるのではないか、このような問題意識から次に實在的定義の議論を検討してみたい。

實在的定義と名目的定義の議論とは、ある概念が可能であるか否かという基準が存在しうることを主張することがそのねらいであり、ある一つの「概念」あるいは複数の名辞の結合としての「命題」が、それ自体可能であるか否かは、経験によるか、ア・プリオリな仕方¹⁵で判明するかは別にして、決定しうるという点に眼目がある。ライブニッツの用いる例では、「最高速度の運動の観念 (idea motus celeritatis)」(G, IV, 424)とは、「経験によって不可能な概念である」とされ、他方、「該当するものが本来あり得ぬ概念」、例えば、「[円い四角]の概念は、「ペガサスのように、たまたまこの世界に該当するものがない概念」と違って、非存在 (non Ens) について考えることであるとされる。ライブニッツにおいて、概念として「不可能」であることが「非存在」と同一であるとされる。

名目的定義と實在的定義の内容をライブニッツの議論に即してまとめるとつぎのようになる。「ただ或る事物を他の諸事物から

識別するためだけの徴を含む」(quae notas tantum rei ab aliis discernendae continent G, IV, 424) ような定義。つまり「定義された概念 (la notion définie) が可能であるかどうかをまだ疑うことができる定義」(G, IV, 450) は名目的定義 (definitions nominales) と呼ばれる。

それに対して、「当の事物が可能的であることがそこから確知される」(ex quibus constat rem esse possibilem G, IV, 424) ような定義が、實在的定義 (definitions reales) と呼ばれる。

この實在的定義は、分析の程度に応じて、さらにいくつかの種類に分類される。

定義の「可能性が経験によってしか証明されない場合」、その定義は「ただたんに實在的」(seulement réelle) であると言われる (G, IV, 450)。

次いで、「可能性の証明がア・プリオリになされるとき」、すなわち「そのものの生成が可能であることを含んでいる場合」、定義は、「實在的であり、さらに因果的である」(encore réelle et causale)。

さらに、「その定義が分析を最後まで押し進めて原始的概念まで達して、その可能性のア・プリオリな証明を必要とするものを何一つ仮定しなくれば」、「完全すなわち本質的である」(partite ou essentielle) と言われる (ibid.)。

ここで注意すべきことは、経験によって定義の可能性が証明される場合も、實在的定義に含まれているという点である。「われわれは事物の可能性をア・プリオリにか、あるいはア・ポステリオリに知る。ア・プリオリにというのは、概念をその要件に、あるいは

可能性の知られている他の諸概念にわれわれが分解し、その内に非
両立的なものが何も無いと知っている時である。：他方、ア・ボス
テリオリにというのは、事物が現実存在することを経験によつて
知る時のことである。というのも、現実存在するか、現実存在した
ものは、確かに可能なことから「(Et quidem a priori, cum notionem
resolvimus in sua requisita, seu in alias notiones cognitae possibilis,
nihilque in illis incompatible esse scimus...a posteriori vero, cum rem
actu existere experimur, quod enim actu existit vel exitit, id utique
possible est. G. IV, 425)」

現実存在する事物を「経験」することは記号操作からは出てこな
い。むしろ記号操作の前提になっている事態である。ここではこの
ような意味論的な問題が顕在化している。

表出論的観点から「ライブニッツは、 \wedge 事物 \vee と \wedge 概念」記号 \vee
の間に何らかの対応関係を基礎づけることを試みた」という点を強
調してきたが、このような基礎付けを試みる思考系列とはまったく
異なる思考系列がライブニッツの哲学には存在するのではなからう
か。その系列は、事物から出発し、通常の意味での日常的な経験に
よる認識を何の問題もなく承認するような思考系列である。そし
て、この素朴な観察あるいは経験的認識を基点とする思考系列は、
決して基礎付けの挫折による苦し紛れや開きなおりではないと思わ
れる。むしろ、この系列は、事物や経験と照合することで定義を確
定していくこうとする意味論的関心が前提されているのであり、デカ
ルトのコギト概念への批判を含みつつ、ライブニッツの哲学の根本
的立場に由来する。

上記の表出論的な解決は、記号と事物の関係全体が、完全性の
程度の差はあれ、見渡されるという議論であり、観念はおろか事
物すらも消去されうる可能性があることは既に確認した。一方、
實在的定義の議論においては、事物そのものに含まれる概念が未
だ展開されておらず、未知なるものへの認識の過程が、定義の実
在性の段階として規定されている。記号や定義が意味を持ちうる
かどうかは、最も厳密に言えば、つまり形而上学的に言えば、原
始的概念に分解されるまではわからないのである。このように知
識の暫定性が強調される文脈において、實在的定義の第一の段階
で経験が取り込まれているということは、ライブニッツの論理主
義的傾向を示す一方で、事物を「経験」することの自明性を示して
いる。表出論的観点では顕在化しなかった、思考の素材がどこか
ら汲み取られるかという問題がここにおいて露わになっている。

六、経験の占める位置

この経験の自明性は何を意味するのだろうか。それは何らかの
知識の源泉として特権的な意味をもちうるだろうか。経験の自明
性については、デカルト批判の文脈において強張されている。

「それゆえ、理性にはなく観察もしくは経験に依存する事実
的・偶然的事象においての（我々に関する限りの）第一真理は、わ
れわれが自身の中に直接的に知覚するあらゆること、即ちわれ
われが自身において自身について意識する (consensumus) こと、
である。なぜなら、それらがわれわれにとってさらに一層本来的
で内在的な経験によつて確証を与えられることなどありえないか

らである。ところで、私は自身のうちに、思惟する私自身だけではなく、私の思惟のうちなる様々なものをも知覚している。ここから私は、私以外の他のものも存在すると考え、漸次感覚にも信頼をよせ、懐疑論者には反対するのである。というのも、形而上学的必然性をもたないようなこれらのものにおいては、われわれは現象相互間の整合性 (consensus phaenomenorum inter se) をもって真理とみなすべきだからであり、またそれというのも、この現象相互間の整合性は根拠なくして (tenere) おこるものではなく原因をもっているからである」(G. W. 208)『普遍的総合および分析、発見および判断の術』。ライプニッツにおいては、「思惟する私自身を知覚することと「私のうちなる様々なものを知覚する」ということは、同時成立的であり、形而上学的思索の順序において優先順位はない。「経験される内容」は「私の存在」と同等の事象性 (realitas) を主張できるのである。換言すれば、ライプニッツは「私の存在」を経験的な事実命題として捉えていると言えよう。私の現在の思考とまさに同じ地平で「現象」が語られている。このような経験の自明性が見すのは、認識論的問題の欠如であり、存在論的問題への置き換えであるように思われる。

こうしてみると、むしろ経験的知識は、より判明な認識への入口でしかない、と同時により判明な認識への判明度の低い素材(つまり「たんに実在的」であるもの)の提供過程として制限されていると考えられるべきであろう。時間軸上に、有限な存在者として存在する私(個体)が、規約的な言語システムとそれと不可分な現在の思考を通じて、現象に定義や規則、モデルを与えていく。しかし、

このことは最終的な全真理の認識という事態からすれば、あくまで過渡的で暫定的なものにすぎない。

だが、この暫定性は理論的には克服される必要がない。記号の恣意性が普遍や真理の確保にとって問題とならないことは先に確認したが、ここでは実体性をもたない「現象」が一定の事象性を有することが確保されればよいのである。すなわち、系統的で普遍的な真理の位相が確保され、それに近づく方途が保証されているならば、認識批判はまったく意味のないもの、あるいは少なくとも副次的な問題となるからである。

したがって、ライプニッツは決して偶然的真理が真理として確立されえないとは考えなかった。「阿片は眠りを催させる」と述べる命題のような事実命題ないし経験(「命題」)は、純粹理性の真理よりもずっと遠くまで私たちを連れていく。純粹理性の真理の方は、私たちの判明な観念のうちにあるものの彼方に私たちを行かせることは決してできない」(A. W. 5:30『人間知性新論』)と主張されるように、われわれの関心は、まさに偶然的(「事実」)真理について何を知ることができるのか、ということである。

整合的に経験されるものの確実性を切り捨てることの方が、ライプニッツにとって深刻な問題であったと思われる。「確かに、諸現象が連結している限り、それらを夢と呼ぼうと呼ぶまいとしたいことではない。というのも、理性の真理にしたがつて諸現象が捉えられるとき、私たちがその現象に基づいて講じる慎重な処理において誤ることはない、と経験が教えているからである」(A. W. 375)ということが偶然的真理の証明に関して、そして彼の哲学

全体において、重要な起点であることは、常に念頭におかねばならない。世界が思考の真理である同一律と矛盾律に従って経験される限り、その世界についてそれ以上疑うことはできないとライブニッツは考える。もはや論理的に整合的な経験の継続だけが問われ、「われわれに」としてきつに「暫本来的で内在的な経験」つまり、デカルトにおいてコギトが獲得される場面での何らかの特殊な意志的経験が拒絶されていることが明らかとなる。現象を現象として論じているかぎりには、形而上学的議論は排除されねばならないのである。

実在的定義の議論において、第一の段階で経験や事物が取り戻されている背景には以上のような経験の位置づけが前提されている。したがって、実在的定義の議論から見た場合、「事物」と「概念」「記号」の対応関係の問題は、アポステリオリな「経験」を、最低段階であるとはいえ、実在的定義とみなすこのうちで解消されているといえよう。

むしろに代えて

統辞論的な表出論的解決も意味論的な実在的定義も、論理的な原子概念を最小単位とする文字や図・形象に信頼をおいている。これらの立場は、現実になされている思考ではなく、このようにしか考えられないという「可能的な思考」に向かって、よりより表現や定義を求める営みである。「真理は命題ないしは思考に属する」とはいえ、それは可能な命題や思考に属する」(G, III, 100)という考え方が、この二つの立場の前提といえよう。

それでは「観念」にはもはや何の役割も与えられていないのであろうか。「人間知性新論」においては次のように主張されている。「記号によって真理を区別しなければならぬ」としては、さらに文字による真理も私たちはもつことになり、それはまた、神の真理か羊皮紙の真理、通常の黒インクの真理か印刷用インクの真理へと区別できるだろう。それゆえ、観念の対象 (les objets des idées) の間の関係 (le rapport) のうちに真理を位置づける方がよい。これによつて、ひとつの観念は他の観念のうちに含まれる、あるいは含まれない、ということになるのである。この関係は「言語 (langues)」に依存せず、神や天使を含めて私たちに与つて共通なものである。したがって、私たちに真理を示すとき、私たちは神の知性のうちにある真理を獲得するのである」というのも、神のもつ観念と私たちのもつ観念の間には、完全性と拡がりに関して無限の差異があるとはいえず、その同一の関係において (dans le même rapport) 一致するものは常に真実であるから」(A, VI, vi, 397) である。私たちが私たちの態度から独立している (independantes de notre bon plaisir) 真理と、私たちが自分によいと思われようように発明する表出 (les expressions, que nous inventions comme bon nous semble) とを区別することができると言われるのである。

観念は「人間」や「私」の内へ閉ざされたものではなく、様々な表出の発明を媒介にして開かれた形で提示されるものである。このことをライブニッツは、いわば神の知性の内へ参入していくこととして捉えているように思われる。

表出論も実在的定義も、いわば人間的視点から語られた神の知性へ

の参入の形式にはかならない。「神には記号は必要ない」(A. VI, 536) のことは対称的に、人間の制限性とは言語を使うことである。ライプニッツにおいて、言語使用への不信と信頼が最後まで併存し錯綜しているように思われるのも、人間の制限性への眼差しと同時に、神の知性と人間の知性の連続性を樂觀的に捉えているライプニッツの哲学体系全体から理解されねばならないだろう。

事物を主題とした体系も、観念を主題とした体系も、あるいはそれが言語であつても、秩序 (ordo) やつながら (inason) といったものが共有されているならば、生じている出来事、知られるべき事柄は同一であるという思考がライプニッツの哲学全体を支えている。

しかし「観念」の問題と同時に、経験が向かう対象である「現象」の問題が残っている。現象がなにゆえに現象と呼ばれ、現象に整合性が見いだせるのか、それを信頼する根拠は何に由来するのかと問うならば、それは現象と位相を異にする「実体」、「モナド」であろう。根拠を問いつけるならば、問題は「現象」から「実体」、「個体」の哲学へと移行していくのである。

注

ライプニッツの文献は、ゲアハルト版哲学著作集(の巻数・頁数)、同じく数学著作集(GM)、アカデミー版(A)の各版を略号で表す。

(1) ライプニッツにおいて自然言語が人工言語に還元されず、独自の発見的機能を持つことについては松田毅「ライプニッツの自

然言語論」アルケー関西哲学会年報第二号、一九九五を参照。

(2) Couturat, *La Logique de Leibniz*. Paris 1901. Nachdr. Hildesheim 1961.

(3) Tönnies, *Leibniz und Hobbes*, ap. *Philosophische Monatshefte*, L. XXIII (1887)

(4) ライプニッツはホッブズを極端な唯名論者と考えているが、それはホッブズ自身の本意であろうか。ホッブズの思想全体を正しく理解していると云えるのだろうか。

「W. N. ワトキンスは、このライプニッツのホッブズ理解を手がかりに、ホッブズの唯名論とはどのような性格のものであったかを検討している(HOBBS'S SYSTEM OF IDEAS Hutchinson Publishing Group Ltd, 1973 邦訳「ホッブズ—その思想体系」、未來社、1988)。ワトキンスは、ホッブズはそのラディカルな唯名論を首尾一貫して保持おらず(p. 104/邦訳 p. 243)、「事物間の類似性のみならず、特定の属性あるいは偶有性に関する類似性をも認め、事実上、共通名辞は、恣意的ではなく、そうした客観的類似性にそくして、新たな対象にも拡張して用いられるという趣旨のことを述べている」(p. 107/邦訳 p. 248)と主張する。「ホッブズの唯名論的傾向は、宗教的・政治的文脈においてつねに最高潮に達する」(p. 108/邦訳 p. 251)が、「事実に関する命題との関連において」(p. 104/邦訳 p. 244)は、唯名論的傾向は、後退しているというのである。

本論文において、ライプニッツのホッブズに対するコメントを取り上げたのは、彼自身の思想の熟成においてホッブズが重

要な契機であったことの一端を示し、そのことによつて唯名論に対するライブニッツの考えを明らかにするためであり、ホッブズ思想そのものの解釈は残念ながら二次的な問題とせざるを得なかった。今後の課題としたい。

(12) Descart. M. LA SÉMIOTIQUE DE LEIBNIZ. Aubier 1978, p. 174

(6) *ibid.*, p. 180

(11) 思考と言語の非分離性をライブニッツは認めているが、次のような箇所では、「非シンボルの思考」について言及され、観念そのものの位相を確保することと密接な関係があることを推測させる。

「これ（筆者補足・定義は名辞の恣意であるという意見）に對して、私は、言葉あるいは他の記号によつて表出される限りで、観念は定義に依存すると答える。……かゝる非シンボルの思考、つまり観念そのものにおけるつながりは感覚にも由来し、判明な想像力にも由来する……」(Hinc respondeo propositiones a definitionibus pendere, quatenus verbis aliisve symbolis exprimuntur. At cognitiones asymbolas, seu ipsarum idearum conexiones, aut a sensu esse, aut a distincta imaginatione … A. II, i. 228. ガロワ 紀, 1672) と述べてゐる。

非シンボルの思考が観念そのもののつながりと言い換えられており、言語的ではない観念のレベルが、感覚や想像力を媒介に知られることが語られている。非シンボルのなものとは何か、それが言語活動といかなる関係にあるかについては稿を改めて検討したい。

(8) 岡部英男「十七世紀の一観念—論争—観念とは何か—東京音楽大学研究紀要第十七集、一九九三においては、デカルト、アールノー、マルブランシニ、ライブニッツらの「観念」という語の用法が考察されている。ライブニッツにおいて記号は一観念を固定し、複雑な事象の代理となつて単純化」……おり、一神の内の観念から人間の内の観念を区別しつつ、同時に両者が一定の関係性を保つことによつて後者が前者によつて基礎づけられる」という機能を果たしているに指摘している。

谷川多佳子「デカルト研究—理性の境界と周縁—」岩波書店、一九九五では、デカルトとライブニッツの真理観・言語観が比較検討されている。

また、『ボール ロッカル論理学』における「もの」「観念」「記号」の関係が十七世紀の哲学者を考察しているものには、堀川徹也「虹と秘蹟—バスカルへ見えないものへの認識」、『右波書店』、一九九三がある。

(9) Thomas Hobbes *Mathesis* Opera philosophica quae Latine scripta omnia / in unum corpus nunc primum collecta studio et labore, Gulielmi Molesworth. 2nd reprint. Alden: Scientia Verlag, 1966 vol. I, p. 31-32

(10) ここでもまた、注1と同様に、ライブニッツが想定するホッブズは、ホッブズの思想そのものと異なるようである。ワトキンスによれば、ホッブズにおいては、名辞は事物それ自体の名辞であるという。つまり名辞は、「話し手あるいは書き手の精神内の概念のしるし」であるだけでなく、事物そのものについて

て語っているといつてよい資格を与えられている (p. 102) 邦訳 p. 238)。

(11) Dascal, p. 191

(12) Dascal, p. 193

(13) *THE COLLECTED ENGLISH WORKS OF THOMAS HOBBES*,
Collected and Edited by W. Molesworth, Routledge/Thoemmes
Press, 1997 vol. 3, p. 50

(14) 統緒論と意味論という観点については Dascal, p. 198 - 204

(15) 石黒ひで「ライプニッツの哲学 論理と言語を中心に」, 岩波
書店, 1984, p. 50

(16) Robert McKee は、「概念と真理の分析に関する一般的研究」
(一六八六年) を書いていた頃、ライプニッツはそれ自身を通し
て把握される原初的な概念が獲得されるという希望を断念し、「い
かなる命題も理性によつては完全に証明されえない」(C. 373) と
結論づけ、結局は概念の可能性の証明のために経験のデータに
後退することが不可欠である」と解釈をしている (Leibniz:
Perception, Apperception, and Thought, Toronto, 1976 p. 129)。

(17) 山田弘明「真理基準をめぐって (下) —ライプニッツとデカ
ルト—」, 名古屋大学文学部研究論集 123, 1995, p. 76

(18) 本論文はダスカルに依拠するところが大きいが、ダスカルが
LA SÉMOLOGIE DE LEIBNIZ で行っている分析は、ライプ
ニッツが実体の哲学を本格的に開始する以前までの著作が対象
である。その後のライプニッツの思索において、どのように言
語の問題が展開するのかについては論じられておらず、展開の

余地を残している。

(しみず・ひろき

筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)